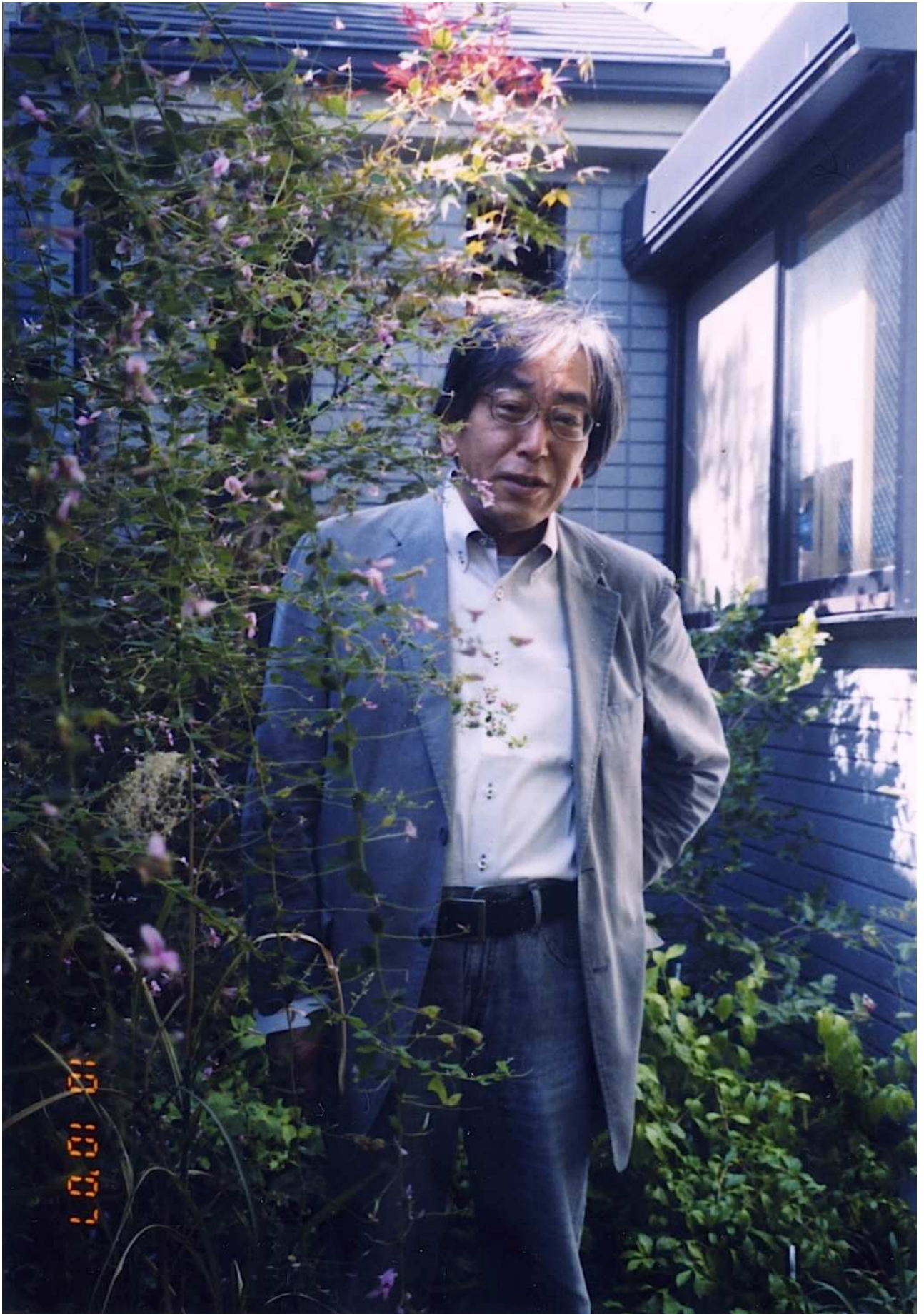


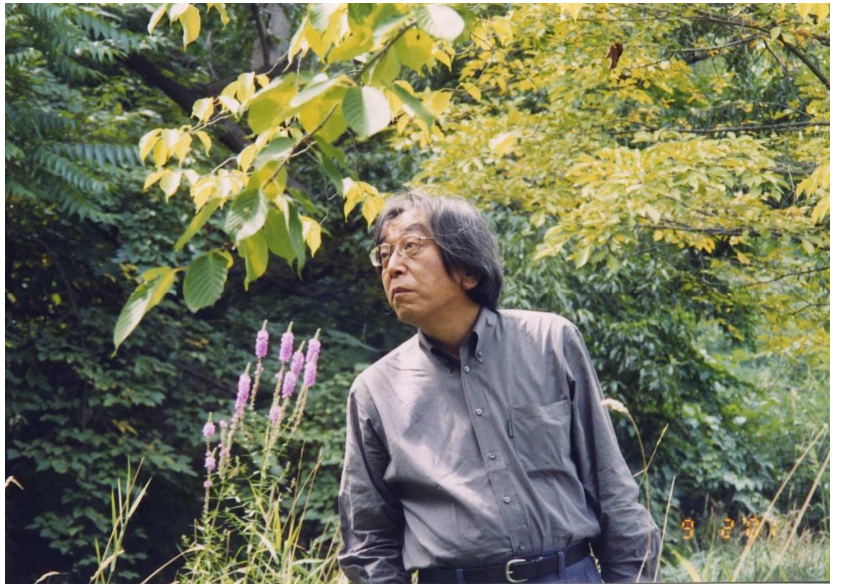
遠藤 彰

人と学問

京都大学・薫風会
立命館大学大学院先端総合学術研究科
2012年3月



60才還暦の誕生日 自宅にて



北海道大学植物園にて



木津川のフィールドワーク



小樽の海岸で貝拾い



書斎にて

遠藤 彰

人と学問

京都大学・薫風会
立命館大学大学院先端総合学術研究科
2012年3月

遠藤彰 人と学問

[目次]

遠藤彰略年譜	1
遠藤彰業績・講義一覧	8
著作	8
学術論文	9
翻訳	20
解説・評論など	21
辞典の分担執筆	25
書評	26
放送メディア	27
報告書	27
学会発表など	30
講座	42
講義	45

遠藤彰業績・講義一覧

※概要は、遠藤彰自身が書いたものです。

(*がついたもののみ編集者による注記)

[著作]

1. 『ベッコウバチのクモがり』 1982年10月 岩波書店 (単著)

クモ狩りをするベッコウバチの生態についての写真と説明。あとがきとして「野外劇」の見方について解説。大学院で研究した内容の一部を盛り込んだ、野外で観察するための手引きでもある。いつどこへ出かければこんな蜂と出会えるか。季節とともに狩りをするクモの種類が変化してゆく。地面にはこのような蜂の巣が埋まっている。写真家関戸勇の協力を得ている。(総頁 32 頁)

2. 『京都の動物Ⅱ 魚・淡水魚・昆虫とクモ』 1988年3月 法律文化社 (共著)

京都の特徴的な動物を野外研究している若手が中心に紹介。深泥池で発見されたヒメハナアブが、北半球の亜寒帯に生息している種と同一で、氷河以来この池に分布している植物ミツガシワと共存してきたこと。また、丹後の海浜砂丘や京都市北白川にいるハナダカバチという幼虫の世話をする亜社会性アナバチを解説・紹介する。(総頁 269 頁) 編集：京都の動物編集委員会(責任編集 好廣眞一・石井実・松原至) 分担執筆：石井実、上田哲行 他 28 名 担当部分：「ミツガシワとヒメハナアブ：氷河以来の関係の遺存」(pp. 128-133) 「ハナダカバチ：灼熱の砂地でハ工を狩る」(pp. 183-188)

3. 『京都の昆虫』 1991年8月 京都新聞社 (共著)

京都の昆虫の写真入り解説書。現況と保護も考える。オニグモ類を狩るベッコウバチ類として数種類を紹介し、丹後の海浜砂丘が狩蜂類の宝庫であること、深泥池とその周辺の興味深い蜂類、さらに恐怖の的になっているスズメバチ、ジガバチの名前の由来などを紹介する。(総頁 252 頁) 編集：京都昆虫研究会(監修 笹川満廣) 分担執筆：武田博清、吉安裕 他 37 名 担当分：「オニグモ類を狩るベッコウバチの仲間」「丹後海岸の狩りバチたち」「深泥池の奇妙なハチたち」「ハチの恐怖とハチのいない恐怖」「ジガバチとジガバチモドキ」(pp. 143-147)

4. 『地球共生系とは何か』 1992年6月 平凡社（共著）
文部省重点領域研究「地球共生系」の成果として刊行された（シリーズ 地球共生系1）細胞から森林、生態系まで、さまざまな共生の仕組みを解説する。そこにおける複雑な相互作用を、とりわけ生態的作用の間接的なネットワークを含めた動態として、巣とか、花とか糞や死体など小さな作用中心に成立する生物群集のつながりにおいて捉える試み。（総頁 262 頁） 監修：川那部浩哉 編集：東正彦、安部琢哉 分担執筆：石川統、松本忠夫、安部琢哉、東正彦、西平守孝、武田博清、遠藤彰、高林純示、大串隆之。 分担分：「生物世界のこのうえなく複雑な相互作用：作用中心の相互に散在する生物群集」（pp. 152-183）
5. 『京都深泥池：氷期からの自然』 1994年8月 京都新聞社（共著）
藤田昇との共著。*
6. 『見えない自然：生態学のポリフォニー』 1995年8月 昭和堂（単著）
将来の生態学の方法として、どのように自然を探るのか、を考察した。じつは生態学にかぎらない。ミクロだけでなくマクロな方向も不可視だが、なによりも肉眼的なスケールでも、じつは見えていないことが多い。既発表の論稿7篇を含めて、書き下ろし9篇を含む。重点領域研究「地球共生系」の成果でもあり、部分的には大学の講義「自然科学概論」のいくつかのテーマを基礎にして構成された。科学とは何でありうるかを、理系文系という旧来の枠を大胆に取り払って思考した。いちばんの課題は、世界の複雑性をどう理解するか、単純な還元論はもちろん、全体論的な思考にも限界がある。その狭間でいかに思考を持続するか。私なりの方法の書。（総頁 324 頁）
7. 『深泥池の自然と暮らし』 2008年3月 サンライズ出版（共編著）
深泥池七人委員会編集部会編。*

[学術論文]

1. 「カリウドバチの比較習性学への試論」 1973年10月 『個体群集生態学会会報』24号（単著）
狩人蜂（カリバチ）の行動習性型を比較して系統などを論じる従来の研究方法を

総説し、それらの方法に対して、さまざまな種的生活史やその生命表など個体群パラメータを含めてデータを集積し、さまざまな行動がその生存や繁殖の文脈でもつ意味を具体的にとらえて再検討することが重要であることを論じた。修士論文にあたる。(pp. 1-11)

2. 「オオシロフベッコウバチ *Episyron arrogans* の獲物選択とそれに作用する要因について」 1976年 『生理生態』17巻1-2号(単著)
博士主論文第1部。ベッコウバチ類は自重の何倍も大きなクモを狩り、営巣して産卵する。幼虫はクモ1匹で育てられる。オオシロフベッコウは円網性のオニグモ・コガネグモ類を狩る習性がある。個体識別して調べると、特定の個体は同種のクモを続けて狩ることも多いが、獲物として有用なサイズのクモの個体数は季節に変化し、場所によって異なることが判明した。獲物選択を決める要因は、単純に色や形のサーチ イメージとは言えず、特定サイズの獲物になるクモの個体数が、各季節に存在していることが重要であることが判明した。(pp. 335-350)
3. 「ゲンジボタル成虫の野外個体群：京都清滝川の状況と方法」 1978年6月 『インセクトリウム』15巻6号(共著)
天然記念物になっている清滝川のゲンジボタル成虫個体群を、渓谷の数地点で同時に標識再補法で調査して、個体数を推定するとともに、生存期間や移動についての知見を得た。ホタルの個体数を推定したはじめての試み。共著者：堀道雄、遊麿正秀、上田哲行、遠藤彰、伴浩治、村上興正。(pp. 4-11)
4. “The behaviour of a miltogrammine fly, *Metropia sauteri* (Townsend) (Diptera, Sarcophgidae) cleptoparasitizing on a spider-wasp, *Episyron arrogans* (Smith)(Hymenoptera, Pompilidae)” 1980年12月 『Kontyu』(日本昆虫学会誌)48巻4号(単著)
博士論文の参考論文。オオシロフベッコウバチの巣に「労働寄生」するタイワンヤドリニクバエの行動を分析した。ハチがクモを狩って運んで来てから、地面に巣穴を掘り営巣する過程で、このヤドリバエは巣穴を視覚的に発見し、ハチを確認すると、付近の草などに止まって待機するが、巣穴が掘りあがってハチがクモを巣穴に搬入した直後に、巣穴上空から、あるいは巣穴の縁に止まり、何匹か蛆(幼虫)を産み落とすか、追尾して巣穴に飛び込む。これはハチの防衛上の盲点をみごとに突いている。それ以外のタイミングだと、ハチに気付かれて失敗することが多い。(pp. 445-457)

5. 「オオシロフベッコウバチとタイワンヤドリクバエの寄主-寄生関係」
1980年 『日本生態学会誌』30巻2号（単著）
博士主論文第II部。タイワンヤドリクバエの寄生を、オオシロフベッコウバチはどのように回避するか。多数の営巣事例から分析。ハエに発見されないためには、物陰での営巣、日没の暗闇営巣が有効。ところが、現実には昼間裸地営巣が多い。場所記憶や営巣条件などが制限要因のようで、そこでは、営巣時間の短縮、想定的に高密度での営巣などが効果をもつ。しかし一度発見されてしまうと、場所変更して、再営巣するほかない。ハチとハエの相互に適応的な作用をその限界ともども議論した。
(pp. 117-132)
6. 「動物の子育て:ブンブンハチが翔ぶ」 1980年4月 『発達』1巻2号（単著）
狩蜂を含むハチ・アリ類の社会性に至る家族関係のさまざまな段階的進化の歴史を、ワーカーの出現をめぐるハミルトンの血縁淘汰仮説も紹介しながら、母蜂と娘蜂の間になぜこのような利他的関係が生じたのか。ワーカーを生産するに至るまでの母蜂のコストは高く、営巣失敗のリスクを負っている。それ以外にも、さまざまな移行過程の説明はできていないこと。次第に厄介な生き方へ向かわざるをえなくした事情は何かを問う。(pp. 56-65)
7. “The nesting success of the spider wasp, *Episyron arrogans* (Smith)(Hym. Pompilidae) and the effect of interactions with other insects around its nesting site” 1981年 *Physiology and Ecology, Japan* Vol. 18, No.1（単著）
博士主論文第III部。オオシロフベッコウバチの営巣成功はどのように可能か。産卵を出発点とする生命表を基礎にするだけでなく、それ以前の営巣成功を左右する要因から分析することが重要であるとの視点から研究。営巣過程での他種との関係がどのように生じるかが、営巣の成否を左右する。すでに分析したヤドリクバエだけでなく、アリなどとの関係を含めて総合的に扱った。どのようなサイズのクモを狩り、どのような寄生者・捕食者と出会うか。場所はもちろん、営巣に要する時間は、巣に接近するアリの妨害によって、さらに加速される。それはヤドリバエに寄生される確率を高めてしまう。「孤独な営巣」が理想だが、現実はいかにない。(pp. 39-75)
8. 「深泥池のミツガシワの訪花昆虫相」 1981年3月 深泥池学術調査団編『深泥池の自然と人』(京都市文化観光局刊行)（単著）

氷期遺存植物が浮島という泥炭湿地をともなう京都洛北の深泥池の学術調査論文集。氷期以来分布する植物ミツガシワの訪花昆虫を3年間調べた研究。二ホンミツバチなどの花蜂だけでなく、千島、シベリアでしか知られていなかったハナダカマガリモンヒメハナアブという小型のアブを含む多数のハナアブ類の生息・訪花を確認（総計30種）。とくにこのヒメハナアブがミツガシワの茎などに産卵、幼虫はその腐植を食し、両者は氷期以来の密接な関係を持続していると判明。植物動物を含めて、深泥池生物群集全体の保全が重視される契機にもなった。調査団長は北村四郎、動物班を総括したのは川那部浩哉。（pp. 268-276）

9. 「だましたまされ、まただます：ハエとベッコウバチの攻防戦」 1982年2月 『昆虫と自然』17巻2号（単著）

日本昆虫学会のシンポジウム「昆虫における個体制と社会進化」での報告をもとに書かれた論稿。個体の論理で眺めると、寄主-寄生の関係にどのような軋轢が生じているかを博士論文の基本データから展開。「相互適応」の意味する「均衡」がどのように危ういかを示した。社会的な現象というのは、他者とのかわりの帰結であり、何かのしくみがうまく成立しているとはかかぎらない。（pp. 7-12）

10. “A preliminary survey on the insects visiting several autumn flowers in the ozegahara moor, with ecological consideration on the flower preference of insects” 1982年 Hara, M. ed. *Ozegahara: Scientific Research the Highmoor in Central Japan.* JSPS（単著）

高層湿原尾瀬の総合学術調査に参加した調査報告論文。複数の開花植物が存在している状態で、数種の訪花昆虫の選択制が日周的にかなり大きく変化することを明らかにした。限られた期間での調査であり、予備的な仕事であるが、訪花活動における昆虫の種間の相互作用に注目した試みは、これまでほとんどなされておらず、訪花選択性を理解するにはその状況分析が重要であることを示唆できた。（pp. 425-437）

11. 「海と砂とハチ」 1984年 『海洋と生物』6巻5号（単著）

海浜砂丘などに生息する二ホンハナダカバチが、その繭が耐水性で、なかの幼虫・蛹の呼吸を可能にしている構造をもつことから、長い時間の経過のなかで暖流に乗って分布拡大をしたのではないかという仮説を提唱。日本海側では北海道の石狩浜まで分布しているが、太平洋側ではせいぜい宮城県どまりでそれ以北に分布しない理由を説明できるのではないか。（p. 284）

12. 「カリバチとヤドリニクバエ:AdaptationとCounter-Adaptation」
1985年 『立命館大学理工学部紀要』43号（単著）
寄主と寄生といった関係では、どちらか一方の論理だけで説明されることが多いが、論文9のテーマを、その相互適応的な現象をどうとらえるかを、さらに一般的な事例で説明した。(pp. 45-46)
13. 「ささやかな「虫の道具づくし」」 1986年11月 『アニマ』14巻11号（単著）
昆虫類の道具使用についての総説的論文。「ボディの延長としての道具」という概念で眺めると、道具使用は珍しい昆虫としてリストアップされる。しかし、「延長された表現型」という概念は、さらに包括的にさまざまな行動の新しい解釈を可能にする。
(pp. 92-94)
14. 「作用中心から群集構造へ」 1989年10月 『個体群集生態学会会報』45号（単著）
イギリスの生態学会 C.エルトンが提唱した生態的な作用中心、花や巣や糞や死体といった散在的な資源をめぐって成立するエフェメラルな小さな生物群集に焦点をあてて、生物群集生態学を発展させることの可能性と重要性を、さまざまな研究をレビューしながら、私自身が展開してきた仕事もその展望のなかに位置づけて示した論稿。これが基礎となって、著書4の論稿が生まれた。群集生態学の特集号への寄稿論文。(pp.65-75)
15. 「狩りバチとプルードン主義の泥棒たち」 1990年10月 『別冊宝島』「新釈どうぶつ読本」（単著）
狩りをする蜂の起源は、寄生から捕食寄生への移行ということで、系統的な裏付けが得られていると通説的には了解されているように思われているが、果たしてこれでよいか。泥棒という「労働寄生」が頻繁に生じている事態は、そのことについて何を物語るか。行動の工カール（偏差）という視点を考慮しつつ、考察を試みた。(pp. 107-109)
16. 「フェアブル、その偏見と真実の狭間で」 1990年10月 『別冊宝島』「新釈どうぶつ読本」（単著）
フェアブル『昆虫記』の仕事は、動物の行動学の歴史のなかでは、R. H. ソープは、その創始者として正当に評価している。しかし、「本能」のしくみについては、N. テインバーゲンの評価は、きわめて不十分として、一蹴している。それは進化

についての疑義をファーブルがあからさまに語ったことに起因するが、なぜそうなったのか。時代的な制約とともに、ファーブルの説明が、徹底した「物の論理」に立脚しており、関係の論理に踏み込めなかったからではないか。科学史の問題として指摘。(pp. 196-204)

17. 「ドーキンジャン・アニマルの世界：現代生物学のツイスト・アンド・ターン」 1992年5月 『現代思想』20巻5号（単著）

R. ドーキンスの『利己的遺伝子』から『延長された表現型』への展開を、世の多くの論評が、非生産的な「誤解の山」ばかりを築いている惨状に対して、その核心となる論理が「延長された表現型の相互作用」として生物群集論を展望したという点にこそあるのであって、それは行動生態学の成果としてドーキンスが到達した地点から、群集生態学をはじめることが可能になっていることを指摘。生物をどのように語れるようになるかこそが、新しい概念によってもたらされる成果である。(pp. 178-195)

18. “Kinship structure and reproductive success in a population of the spider wasp, *Batozonellus lacerticide* Palla (Hym. Pompilidae)” 1993年9月 *Physiology and Ecology, Japan* Vol. 29, No. 1-2 [Published as *Animal Societies: Individuals, Interactions and Organization* (eds. P. J. Jarman & A. Rossiter). Kyoto University Press. 1994年]（共著）

キスジベッコウバチの個体群の世代を超えて血縁関係を追跡した 10 年間の野外調査をもとに、個体群の血縁関係、母蜂とその姉妹の間で、多くの蜂はかなり定着的に営巣するが、そこから翌年羽化してくる娘、つまり姉妹のどれか 1 匹が定着し、他は分散するという構造が明らかになった。この蜂はもちろん社会性ではなく単独性であるが、W. D. ハミルトンの血縁淘汰説との関連で考察すると、社会性は姉妹が同じ巣にとどまることで成立するのに対して、ここではとどまることは激烈なコンフリクトになる。この分散と定着の逆転の理解が社会性進化の説明の鍵になり、娘蜂の不妊性は社会性の前提であるが、その前提の成立する論理の必要性などを論議した。特定研究「生物の適応戦略と社会構造」の成果を含む。共著者：遠藤彰、遠藤知二。(pp. 105-117)

19. 「減数分裂と恋愛」 1993年12月 『imago』4巻13号（単著）

性をめぐる現代生物学の到達点は、従来の生物学者の通念をはるかに逸脱しているという認識から、L. マーギュリスの細胞共生説のなかで、スピロヘータ細胞から波動毛が生じて、有糸分裂から減数分裂への可能性が拓けたとする推測を、原

理的に考察・検討した。とくにマーギュリスに欠落している遺伝的なコンフリクトの観点を補う筋を立て再構成を試みた。(pp. 68-79)

20. “Prey selection by a spider wasp, *Batozonellus lacerticida* (Pallas)(Hym. Pompilidae): effects on prey species, size and density” 1994年 *Ecological Research* Vol. 9, No. 2(日本生態学会英文誌) (共著)

キスジベッコウバチの獲物選択をめぐって、オニグモ類の間でどの種が狩られるかに間接的な効果が検出された。簡単に言うと、季節的に成長の少し早いヤエンオニグモと少し遅れるアカオニグモ、さらに遅れるキバナオニグモの間で、ヤエンの密度が高いときは、キバナが、低いときはアカが狩られやすくなる。間接効果がこのような群集構造の関係を動的に左右している。重点領域「地球共生系」の間接作用と群集構造の研究班における成果を含む。共著者：遠藤知二、遠藤彰。(pp. 225-235)

21. 「内なる時間と外の時間:「時計」の内在化=進化を可能にしたのは何か」 1994年10月 『imago』5巻11号 (単著)

生物時計の進化は遺伝子の介在も含めて、内なるリズムの問題として、端的に生理学の原理で考えられることが通例だが、生態的な「外の論理」で考察することの重要性を指摘。この生態的な文脈での考察こそが「適応進化」を可能にする条件を理解する核心に触れるはずである。格好の思考実験として、アンコウの雄と雌をめぐり議論で試みた。(pp. 160-171)

22. 「メビウスの帯を歩くアリ:カルヴィーノと虫をめぐって」 1995年9月 『ユリイカ』27巻10号 (単著)

イタリアの作家カルヴィーノの「アルゼンチン蟻」という作品は、このヨーロッパへの侵入種がもたらしたパニックを、世界大戦とからめて、シニカルなパロディ仕立て描いたものと読める。この作品は、イギリスの生態学者 C. エルトンの『侵略の生態学』よりずっと早く書かれているのがすごい、この対立を超えた侵入生物の問題は、エイズも含めて、今きわめて深刻な事態をもたらしている。(pp. 254-265)

23. 「ドリトル先生の幻の普遍言語:めくるめく意識をめぐって」 1995年12月 『imago』6巻13号 (単著)

動物行動学の展開に、認知心理学などの新たな動向を含めても、「動物の心理」の分析はまだまだ困難であるが、『動物のことば』を書いたティンバーゲン以来、こ

の課題は「永遠のテーマ」であろう。ここでは「動物の心がある」という仮説を立てて進むしかないこと。方法をめぐる議論を試みた。とりわけオーストリアの動物学者ユクスキユルの「環世界 Umwelt」の仮説を再評価しつつ、その交錯する世界をいかに理解するかが重要であると指摘した。(pp. 122-133)

24. 「狩蜂の世界にみえる「ものづくり」と「泥棒」」 1996年6月 横山俊夫、川那部浩哉ほか編『安定社会の総合研究:ものをつくる・つかう』(京都大学人文科学研究所研究論集) (単著)

昆虫やクモを狩って営巣するカリバチにおいて、いわゆる「労働寄生」と呼ばれている現象がかなり頻繁に生じる。同種他個体のつくった巣や獲物や卵を泥棒する行動である。この泥棒が起る状況というのは、獲物不足などの危機から生じるかのように思われるが、果たしてそうか。この泥棒は、過剰になると、卵の共食いの状況を生むので、個体群の減少につながるが、個体にとっては、狩りという危険をとまなう生き方よりも、はるかに安全な方法で、条件が許せば、すぐさま泥棒へ走るといった傾向をもっている。

(pp. 82-116)

25. 「河川の生物群集と物理的環境との関係」 1996年 『水資源研究センター研究報告』3号(京都大学防災研究所) (共著)

河川の川原はもともと狩蜂類の営巣地として好適な場所のひとつであったが、いわゆる河川改修や川砂採取などで、現在ではその生息場所はほとんど失われている。河川のあり方とそこに生息する生物群集との関係を、流域全体として検討する試みの重要性を示唆する。共著者：渡辺直、谷田一三、竹門康弘、吉田真、西野麻知子、遠藤彰。

(pp. 12-16)

26. 「湿地とはどういう自然か:深泥池保全の基礎研究を踏まえて」 1997年 『水と湿地の生きものたち 1996 Ramsar Symposium Niigata』 (共著)

深泥池の水生植物を含めた生物群集の特性について、「浮島」という湿地がその遷移において、通常のパターンとは異なった様相を示しており、とりわけ水質の悪化にきわめて敏感に反応し、ミズゴケ類への悪影響を受けやすいこと。それにとまない、浮島に成立しているクモや昆虫類を含む生物群集の変容につながることを述べた。共著者：藤田昇、田端英雄、遠藤彰。(pp. 159-161)

27. 「カリバチから見た流域環境」 1998年 『水資源研究センター研究報告』5号(京都大学防災研究所) (単著)
- 25の論文の個別篇である。カリバチ類の生息場所の特性から、流域全体を概括すると、里山などの森林、河川の川原、扇状地、海浜砂丘など随所にカリバチに好適な場所が形成されている。それらの生息場所が、互いに関連しながら分布していることが、それぞれの場所での本来の生物群集を成立させていたと考えられるが、現在はその基本パターンが崩壊しつつある。
28. 「生態的断片に成立する小さな生物群集にみる「揺らぎ」あるいは「再帰性」：生態学的事件群からさまざまな生態遷移へ」 1998年10月 横山俊夫、川那部浩哉ほか編『安定社会の総合研究：ことがゆらぐ・もどる／なかだちをめぐる』(京都大学人文科学研究所論集) (単著)
- 偏在するか断片的な小さな生物群集、カリバチの巣とか花とかを中心に成立する生物群集はエフェメラルであるが、それなりの再帰性をもって再現される。そのような断片的な事象も、大きな生態遷移のなかで変容しつつ持続する。しかし、そのような生態的な断片的事件が、さまざまな媒介になり、間接作用を引き起こし、逆に大きな遷移に関与している可能性を論じた。(pp. 53-85)
29. 「里山と川原と海浜砂丘からの風景：砂地の喪失の意味すること」 2000年3月 『立命館大学国際平和ミュージアムだより』7巻3号 (単著)
- 生息場所としての砂地をキーワードにして 27の論文の内容をさらに展開。自然の流域が水とともに大量の砂を運搬していること(いたこと)。歴史的に人間がその砂の流れを止めたり、別の場所へ運び利用して、現代のコンクリートの都市が形成されていること。あまりに当然のことながら、自然環境を破壊した20世紀への保全生態学からの「警鐘」の論。(pp. 14-17)
30. 「木津川川原の狩蜂と花蜂：生息場所と訪花植物」 2002年3月 『河川学術研究木津川班年次報告』(CD-ROM) (単著)
- 現在も大量の砂を運搬している木津川において、川原・中州・堤防などで開花植物の花蜂などの訪花昆虫ならびに砂地に営巣している狩蜂の現況を調査した報告論文。最終報告論文にも収録の予定。
31. 「昆虫類」「ハチ・アリ(膜翅)目」 2003年4月 京都府企画環境部刊『京都府レッドデータブック』(上：野生生物篇) (共著)
- 吉安裕・荒谷邦雄・内藤親彦などと分担執筆。*

32. 「ハチ・アリ(膜翅)類」 2003年4月 京都府企画環境部刊『京都府レッドデータリスト』(共著)
内藤親彦・橋本佳明と分担執筆。*
33. 「木津川川原の狩蜂と花蜂:生息場所と訪花植物」 2003年12月 河川生態学学術研究会木津川研究グループ編『木津川の総合研究:京田辺地区を中心として』:455-468pp. リバーフロント整備センター(単著)
34. 「「生態遷移」というグランド・デザインの発想:1900年前後の生態学と遺伝学」 2004年7月 『季刊 d/SIGN』no.8:128-134pp. (単著)
大田出版([松原洋子・小泉義之編『生命の臨界——争点としての生命』:159-179pp. 人文書院(2005.2)に所収))。
35. 「江戸の虫たちをめぐる表象と言説:秋草の美学から虫のパロディへ」 2004年11月 上田哲行編『トンボと自然観(Ⅱ部 虫たちをめぐる自然観)』:408-424pp. 京都大学学術出版会(単著)
36. 「フェアブル『昆虫記』の翻訳と読者:「虫好き文化ルネサンス」の現代と未来」 2004年11月 上田哲行編『トンボと自然観(Ⅱ部 虫たちをめぐる自然観)』:425-461pp. 京都大学学術出版会(単著)
37. 「現代の「環境問題」と生態学」 2005年2月 松原洋子・小泉義之編著『生命の臨界——争点としての生命』:180-226pp. 人文書院(単著)
38. 「Lewontin の環境概念をめぐるノート:複雑性をとらえる「Niche 構築論」の射程において」 2005年3月 『生命科学・生命技術の進展に対応した理論と倫理と科学技術社会論の開発研究』(文科省科学研究費補助金・平成16年度研究成果報告書:代表小泉義之):70-79pp. (単著)
39. 「藤袴」(現代語訳と註釈) 2006年3月 文明と言語研究班編『難波鉦一梅之部抄』(京都大学人文科学研究所):18-19pp. (単著)
40. 「生物の相互作用」 2006年4月 久保幹・吉田真編『生命体の科学と技術』(培風館)(4章 多様な生物社会):122-132pp. (単著)

41. 「競争と共存の生態学」 2006年4月 久保幹・吉田真編『生命体の科学と技術』(培風館)(4章 多様な生物社会):138-168pp. (単著)
42. 「博物学の普遍精神:自然の体系を探る」 2006年6月 遠藤彰編著『生物多様性をめぐる言説・表象の認識論的検討:博物学から現代生態学への言説と概念の変遷』(2005年度立命館大学学術研究助成報告書):1-23pp. (単著)
43. 「変遷と変形の論理:世界の変調」 2006年6月 遠藤彰編著『生物多様性をめぐる言説・表象の認識論的検討:博物学から現代生態学への言説と概念の変遷』(2005年度立命館大学学術研究助成報告書):24-33pp. (単著)
44. 「有機体という概念の誕生」 2006年6月 遠藤彰編著『生物多様性をめぐる言説・表象の認識論的検討:博物学から現代生態学への言説と概念の変遷』(2005年度立命館大学学術研究助成報告書):34-47pp. (単著)
45. 「『自然の経済』と自然神学」 2006年6月 遠藤彰編著『生物多様性をめぐる言説・表象の認識論的検討:博物学から現代生態学への言説と概念の変遷』(2005年度立命館大学学術研究助成報告書):48-61pp. (単著)
46. 「地図上の言葉から関係の言葉へ:生態学的複雑性の認識へ」 2006年6月 遠藤彰編著『生物多様性をめぐる言説・表象の認識論的検討:博物学から現代生態学への言説と概念の変遷』(2005年度立命館大学学術研究助成報告書):62-74pp. (単著)
47. 「利己的遺伝子「ドライブ」とその帰結:Burt & Trivers(2006) Genes in Conflictの展望」 2007年3月30日 松原洋子編『生命科学/技術の公共性と生活者の利益をめぐる諸問題の歴史的・社会的・倫理的 研究』(文科省科学研究 B・研究成果報告書):12-26pp. (単著)
48. 「納戸」(現代語訳と註釈) 2007年3月30日 文明と言語研究班編『難波鉦一松之部抄』(京都大学人文科学研究所共同研究 拾遺):46-49pp. 京都大学人文科学研究所発行〔分担〕(単著)
49. 「オニグモとベッコウバチとヤドリニクバエ三者の複雑な関係をめぐって」 2007年6月30日 八尋克郎・榊永一宏編『『昆虫記』刊行100

年記念日仏共同企画]『フェアブルにまなぶ』:22-25pp. 日仏共同企画
展実行委員会 (共著)

北海道大学総合博物館・国立科学博物館・滋賀県立琵琶湖博物館・兵庫県立人と
自然の博物館・北九州市立いのちのたび博物館・フランス国立自然史博物館)刊。
(遠藤知二と共著)

50. 「虫たちをめぐる自然観の変遷:フェアブルの疑問は解けたのか?」
2007年6月30日 八尋克郎・榊永一宏編[『昆虫記』刊行100年記
念日仏共同企画]『フェアブルにまなぶ』:99-104pp. (単著)
日仏共同企画展実行委員会(北海道大学総合博物館ほか)刊。

51. 「生物多様性と生物群集の保全をめぐる言説の再考:D.タカーチ『生
物多様性という名の革命』の彼方へ」 2007年12月 『生物学史研
究』79号:29-56pp. (単著)

52. 「ドゥルージアン/ガタリアン・アニマル:「リトルネロ」のプラトー探検」
2008年1月10日 小泉義之・鈴木泉・松垣立哉編『ドゥルーズ/ガタ
リの現在』:325-358pp. 平凡社 (単著)

53. 「木津川川原の訪花昆虫群集の季節推移」 2008年8月11日 河
川生態学術研究会木津川研究グループ編『第2フェーズ研究報告』
(CDROM版):17pp. リバーフロント整備センター刊 (共著)
遠藤知二と共著。

54. 「多細胞生物体の迷路:死とともに生きること」 2009年2月25日
『生存学』vol.1:84-111pp. (立命館大学生存学研究センター編)生活
書院刊 (単著)

55. 「ダーウィンの生物体の変奏と変換:ミズと蘭と蜂」 2009年4月15
日 『現代思想』37(5):114-135pp. 青土社 (単著)

56. 「海岸砂丘のベッコウバチの生態」 2010年9月30日 『昆虫と自
然』(特集:海浜の昆虫)45(10):5-10pp. ニューサイエンス社 (共著)
遠藤知二と共著。

57. 「討議:生存のエコロジー」 2011年10月 『現代思想』39(16):
56-77pp. (共著)

中村桂子、大村敬一、近藤和敬との対談。*

58. 「狩蜂の「本能」:ファール『昆虫記』の言葉を考える」 2012年3月
横山俊夫編『ことばの力:あらたな文明を求めて』:225-268pp. 京都大学学術出版会 (単著) [絶筆]

[翻訳]

1. 『延長された表現型:自然淘汰の単位としての遺伝子』 1987年7月
紀伊國屋書店 (共訳)
原著者、ドーキンス (R. Dawkins) の遺伝子の表現型の概念を延長・拡張した、動物行動学の理論的な展望と達成の書を翻訳。原著 *The Extended Phenotype*. 1982。遠藤彰が全14章のうち1,2,5-7,12-14章を、遠藤知二が残り6章をそれぞれ分担訳し、相互に検討した後、日高敏隆と3人で全体を通して検討した。(総頁555頁) 共訳者:遠藤彰、遠藤知二、日高敏隆。
2. 『動物群集の様式』 1990年12月 思索社 (共訳)
原著者、エルトン (C.Elton) がイギリスのワイタムの森を中心に長年にわたって行われた生態調査を集大成し、動物群集の存在構造の基本パターンを論じた書の翻訳。原著 *The Pattern of Animal Communities*. 1966 全19章。監訳:川那部浩哉 共訳者:小野山敬一 (1-2、19章)、竹門康弘 (3)、島崎茂美 (4)、宮沢望 (5)、和田岳 (6)、竹市悟己 (7)、岩崎敬二 (8、14)、高桑正樹 (9)、遊磨正秀 (10-11)、中井克樹 (12)、遠藤彰 (13、15-16)、片野修 (17)、清水信幸 (18) さらに遠藤彰が原注及び原表説明を訳し、遠藤彰と江崎保男と川那部浩哉が全体を検討した。(総頁710頁)
3. 『ブラインド・ウォッチメーカー:自然淘汰は偶然か?』 1993年10月
早川書房 (共訳)
原著者、ドーキンス (R. Dawkins) が、生物の進化は何の目的もなく、ただ盲目の時計職人が一步一步自然淘汰を累積した結果によって生成した過程であることを、巧みな思考実験 (コンピュータ・シミュレーションも含む) とみごとなレトリックで理論的に説明した書の翻訳。全11章。上下2分冊。原著 *The Blind Watchmaker* 1988 全11章。監修:日高敏隆 共訳者:遠藤彰 (1-4章)、中嶋康裕 (5-6章)、遠藤知二 (7-9、11章)、疋田努 (10章)。遠藤彰が全体を検討し、さらに中嶋康裕が修正し、最終的に日高敏隆が検討した。(総頁280+254頁)
4. 『盲目の時計職人』(新装版) 2004年3月 早川書房 (共訳)
日高敏隆・中嶋康裕・遠藤知二・疋田努と共訳。 [翻訳3の新装版*]

[解説・評論など]

1. 「京都府のハチ類」 1974年3月 京都野生生物研究会編『京都府の野生動物』京都府公害対策室刊行（単著）
森下正明が中心に京都府の野生生物の生息分布の状況を過去の文献を渉猟することを含めて整理したなかで、アリ類を除く膜翅目に関する部分を担当してまとめた。(pp. 19-30)
2. 「クマバチの追いかけっこ」 1976年5月、7月 『京都自然観察会会報』Nos. 34, 35（単著）
クマバチの雄が初夏に空中にホヴァリングして「なわばり」をもち、付近を通過する昆虫や雌を追尾する配偶行為を報告した。(pp. 1-2, pp.2-3)
3. 「(座談会) 永遠の語り部(上下)「現代の奇跡 深泥池 31/32」」
1981年6月16日・17日 『京都新聞』（共著）
北村四郎・村田源・田端英雄・川那部浩哉と。
4. 「深泥池のカルテ」 1981年12月 『自然保護』(日本自然保護協会)235号（単著）
深泥池学術調査の結果から、天然記念物に指定されている水生植物群落だけでなく、浮島のミスグモやヒメアブやプランクトンにも氷期遺存種が生息することが確認されたが、道路で分断された集水域の減少から水質の悪化や侵入植物の分布拡大が進行し、池の生物群集が重篤状態になっていること。(pp. 12-13)
5. 「始祖鳥の鳴き声？」 1984年6月 『立命館大学広報』154号（単著）
ジュラ紀の始祖鳥が鳴いたかどうか。生物学者なら、その化石に鳥にあるような鳴管の有無を論じる。ところが、作家カルヴィーノは、もし鳴いたとして、その鳴き声まで再現して見せた。『学問的禁欲』とは何か。(総頁 56 頁)
6. 「(シンポジウム) 進化の不思議」 1984年8月1日 『創造の世界』51: 26-51, 小学館京都編集室（共著）

川那部浩哉・岩井保・梅原猛・河合雅雄・作田啓一と。

7. 「シカゴの指令をもった仕掛人と消化不良の hopping monster」
1984年12月 『日本動物行動学会 News-letter』5号（単著）
日本動物行動学会のラウンドテーブル2 「生物史戦略と現代進化論」における
粕谷報告と河田報告についてのコメント。（pp. 8-9）
8. 「絶滅—思考」 1985年4月 『立命評論』80号（単著）
ポール・アーカリックが著書『絶滅』のなかで、地球上の種の絶滅が、飛行機の
リベットを抜いているようなものであるという喩で語ったことを紹介しつつ、わ
れわれの周囲で起っている大量絶滅の原因である人間の活動をどう考えるべきか、
それが環境改変を旨とする人間の本性であるなら、不可避なのかどうか。
（pp.59-60）
9. 「(シンポジウム) 森の中の化学戦略」 1985年8月1日 『創造の
世界』55: 40-67, 小学館京都編集室（共著）
安部琢哉・河合雅雄・川那部浩哉・作田啓一と。
10. 「深泥池の動物;絶滅と背中合わせに生きる珍しい動物たち」 1990
年8月 『京都 TOMORROW』12号（単著）
深泥池の動物には、植物と同様、浮島中心に北方性の珍しい種がいるが、それら
は水生植物と「運命共同体」のようなものであり、水質の悪化などで、危機的な
状況にある。保全の具体策が緊急に必要であることを論じた。（pp. 27-34）
11. 「砂漠の動物たちの生活」 1991年 『生物の生態』(ワイドV) 4
巻 学習研究社/タイムライフ（単著）
小野勇一・大島康行編と分担執筆。砂漠に棲息する動物たちの生活の乾燥へのさ
まざまな適応的特性を解説。（pp. 88-93）
12. 「個体淘汰 VS 群淘汰:隠喩としてのミミズ」 1991年8月 『週間
朝日百科——動物たちの地球』1巻（単著）
自然淘汰がどのように作用するかについては、その作用単位をめぐって個体が群
（グループ）かとの論争がある。ダーウィンからウィン=エドワーズとハミルト
ン、G. C. ウィリアムス、ドーキンスそして D. S. ウィルソンの議論を、ミミズ
を喩えとして解説した。（pp. 294-295）
13. 「狩りバチたちのテクニック」 1993年1月 『週間朝日百科——動

物たちの地球』 3 卷 (単著)

狩りバチの狩猟行動が、その獲物となる昆虫やクモによって著しく異なる。狩りバチはその技法をより洗練し、また相手の昆虫やクモはこの天敵をいかに回避するかという、相互エスカレーションの関係にある。しかし一方は「ご馳走」他方は「命懸け」である。(pp. 246-266)

**14. 「深泥池の動物群集:交錯する北と南の動物」 1993 年 9 月 『週
間朝日百科——動物たちの地球』 10 卷 (単著)**

深泥池の生物群集の特性として、氷期以来の北方性の要素と現在の京都の暖温帯の南の要素が、浮島という泥炭湿地の上あるいは周囲で交錯した関係を成立させている。この関係の特異性こそが貴重であり、それが歴史ある都市近郊に今も存在していることは、人間と自然の関係のあり方について深い示唆を与える。(pp. 283-284)

15. 「再び「地球共生系とは何か？」」 1995 年 9 月 第 9 回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編『地球共生系——多様な生物の共存する仕組み』クバプロ (共著)

同シンポジウムの報告者、井上民二、高林純二、東正彦、安部琢哉で行なったパネルディスカッションの記録。遠藤彰はその総合司会をつとめ、議論をまとめた。(pp. 162-174) (共同執筆につき本人担当部分抽出不可能)

16. 「歴史的な存在としての深泥池生物群集:その生態的な病は「われわれの病」」 1998 年 3 月 『京都 SANZAN』(京都自然史研究所)69 号 (単著)

深泥池の生物群集が、水質の悪化から変容し、いわば「生態的な病」に陥っていると診断できるが、じつはこのような状態に陥らせたのは、端的に言って、われわれ人間の社会的文化的な病そのものの反映ではないか。保全生態学の視点からの考察。(pp. 34-35)

17. 「ベッコウバチ対ヤドリニクバエ」 1998 年 9 月 日高敏隆監修『日本動物大百科 昆虫 I』平凡社 (単著)

オオシロフベッコウバチとヤドリニクバエの寄生-寄生関係の行動学的ならびに生態学的な攻防を紹介する。(pp. 34-35)

18. 「動物版「逆工学」リヴァース・エンジニアリング？」 1999年1月
『Aster News』(立命館大学理工学振興会)5号 (単著)
R. ドーキンスの *The Climbing Mount Improbable* の紹介も兼ねて、生物のしくみの理解と工学機械のしくみの関連を述べた。(コラム記事)
19. 「追悼井上民二さん」 1999年6月 井上民二追悼集刊行委員会
編『未知なる大地をめざして:追悼井上民二』(単著)
ランヴィルの航空機事故で死亡した井上民二(京都大学生態学研究センター教授)の追悼文。彼のめざしていた熱帯のハナバチ類の進化その群集生態学の展望についてのコメント。(pp. 381-385)
20. 「狩蜂たちの京都:今も棲息の楽園たるか」 2000年5月 『京都新聞』5月17日 (単著)
京都の寺社の庭や境内は、かつて鴨川など河川の河原や扇状地にいた砂地に好んで営巣する狩蜂に格好の避難場所であった。本来の生息地を失っても、人工的ではあるがそれなりの手入れをされ「安定」した場所であったからである。いわば避難場所でもあった。コラム『風の散歩道』。
21. 「水辺の小さな生き物たちとの対話と共生:創造的な水辺と不毛の砂地？」 2000年5月 『土曜講座だより』(立命館大学人文科学研究所)285号 (単著)
川原や砂浜砂丘などの狩蜂たちの生態を紹介し、水辺に近い砂地も不毛ではないし、なによりも水の作用が生物たちの活動に基本的に重要な条件を与えていることを述べた。「水辺と生物」の3回連続講演を組織した。(pp. 10-11)
22. 「海浜砂丘と失われた川原の狩蜂たち」 2000年 『立命館大学校友会報』202号 (単著)
河川改修と川砂採取によって河川から川原が失われ、砂地に営巣する多くの狩蜂の棲息場所が失われてきた。砂地を通してその意味を考える。(pp. 10-11)
23. 「コミュニケーション まだ見ぬ南の蜂とランの奇妙な関係」 2002年7月～ JT 生命誌研究館『コラムの庭』
(<http://www.brh.co.jp/salon/.column/column/01.html>) (単著)
業績一覧には「擬態あるいはコミュニケーション:まだ見ぬ南の蜂とランの奇妙な関係」と記載あり。*

24. 「道具 ハイパー・サイクルをめぐって」 2002年7月～ JT生命誌研究館『コラムの庭』
(<http://www.brh.co.jp/salon/.column/column/02.html>) (単著)
業績一覧には「ハイパーサイクルをめぐって：道具をめぐって周期ができること」と記載あり。*
25. 「反復 反復するびっくり箱：あるいは思考のためのポール・ヴァレリー」 2002年7月～ JT生命誌研究館『コラムの庭』
(<http://www.brh.co.jp/salon/.column/column/03.html>) (単著)
26. 「道具 アンモフィラ(砂好き)の妄想」 2002年7月～ JT生命誌研究館『コラムの庭』
(<http://www.brh.co.jp/salon/.column/column/04.html>) (単著)
27. 「時 時を止める？」 2002年7月～ JT生命誌研究館『コラムの庭』
(<http://www.brh.co.jp/salon/.column/column/35.html>) (単著)
28. 「気懸かりな江戸の虫たち」 2004年6月 『人文』第51号:38-39. 京都大学人文科学研究所 (単著)
29. 「鳥の世界から」 2004年10月 『季刊京都アスニー・創造する市民』81:10-17.京都市生涯学習総合センター (共著)
長谷川博・横山俊夫と鼎談「21世紀の花鳥風月：京都からの提言(第2回)」
30. 「虫とはなにか」(コラム) 2004年11月 上田哲行編『トンボと自然観(Ⅱ部 虫たちをめぐり自然観)』:307-308pp. 京都大学学術出版会 (単著)

[辞典の分担執筆]

1. 『岩波生物学辞典(第3版)』 1983年3月 岩波書店 (共著)
生態学に関連した新項目ならびに改訂綱目のうち「最適戦略」「生活史戦略」「群淘汰」「共進化」「血縁淘汰」「繁殖価」など16項目を分担執筆。川那部浩哉とともに検討した。 編：山田常雄、前川文夫、江上不二夫、八杉竜一、小関治男、古谷雅樹、日高敏隆。

2. 『科学の事典(第3版)』 1985年3月 岩波書店 (共著)
飯野徹雄編の大項目事典『科学の事典』(第3版)において、「行動と社会」を上田哲行・川那部浩哉・遠藤彰が共同執筆。動物行動学と動物社会学の解説的総説。(pp. 930~941)
3. 『日本大百科全書 *Encyclopedia Nipponica*』 1986年 小学館 (共著)
分担執筆。12巻の「進化」の項目を上田哲行・遠藤彰が分担執筆 (pp. 445~453)。「進化論」の項目を遠藤彰が単独執筆 (pp. 468~470)。その他「失われた環」など20項目を分担執筆。
4. 『広辞苑(第4版)』 1991年11月 岩波書店 (共著)
新村出編。生態学・生物学に関する項目を遠藤彰・川那部浩哉・原田英司と分担共同執筆。(共同執筆につき本人担当部分抽出不可能)
5. 『情報学事典』 2002年5月 弘文堂 (共著)
北川高嗣ほか編。「ミツバチのコミュニケーション」の項目を分担執筆。

[書評]

1. 「中村禎里(編著)『20世紀自然科学史』(6-7巻生物学)」 1983年『海洋と生物』6巻4号 (単著)
20世紀生物学の現代史として、とくに分子生物学以外の領域についての貴重な試みの評価。(p. 284)
2. 「W. M. ホイラー『昆虫の社会生活』(新版)」 1986年5月 『アニマ』159号 (単著)
渋谷寿夫訳の旧著の改訂新訳版。古典的な名著に、現代的な評価を盛り込んだ点を評価。(p. 106)
3. “J. Kikkawa & D.J. Anderson (eds) “Community Ecology: Pattern and Process”” 1987年 *Networks in Evolutionary Biology* No. 5 (単著)
群集生態学の研究方法をめぐる新しい試みの評価。『生態学のポリフォニー』に加筆修正して収録。(p. 64)

4. 「河田雅圭『進化論の見方』 1990年1月 『日本動物行動学会 News-letter』15号 (単著)
進化生物学の新たな潮流についてのタイムリーな紹介・解説の書。(pp. 36-38)
5. 「社会性昆虫をめぐる「ポスト・ハミルトン革命」を模索する大冊」 1993年6月 『日経サイエンス』23巻6号 (単著)
東正剛・松本忠夫編著『社会性昆虫の進化生物学』および井上民二・山根爽一編著『昆虫社会の進化』の書評。(pp. 36-38)
6. 「『はなだか蜂研究記』の高い峰」 1996年 遺稿集出版委員会編『常木勝次博士を偲んで』同刊行会 (単著)
故常木勝次の昆虫の行動・心理学分野の「幻の名著」を現代的に再評価する。(pp. 138-142)
7. 「生態心理学の展望へのいささかの杞憂を込めた共感」(佐々木正人『ダーウイン的方法』の書評) 2006年3月 『季刊 d/SIGN』no.11: 48-49pp. 大田出版 (単著)
8. 「「レジームシフト」と生物群集動態の架橋:生態遷移論の再考へつながる射程(綿貫論文への「ことほぎ」)」 2010年3月31日 『日本生態学会誌』60(1):15-17pp. (単著)

[放送メディア]

1. 「ベッコウバチの野外観察」 1987年7月～8月 NHKラジオ第1 (単独)
「私の自然」(馬場象三構成) 野外観察の仕方についてエピソードを交えて解説した。
2. 「ベッコウバチ-狩り蜂の巧みな戦術」 1988年10月12日 NHKTV (単独)
『日本動物記』(辰巳宏構成) 京都の瓜生山を中心に、オオシロフベッコウバチのジョロウグモ狩りやヤドリニクバエの産卵 [= 蛆] などのシーンを同行撮影。ベッコウバチのTV初登場。

3. 「空中の狩人・ハチ——狩と子育ての進化史」 1990年6月11日
NHKTV (単独)

「地球ファミリー」(辰巳宏構成) 後にカナダのCNTVでも放映。資料映像も含めて、狩蜂の進化を解説。

[報告書]

1. 「キスジベッコウ *Batozonellus lacerticida* の社会構造:性比・血縁関係を含めた分析」 1984年3月 特定研究『生物の適応戦略と社会構造』昭和58年度報告書 (単著)

単独性のハチであるが、母親は営巣場所を集中させるので、次世代の姉妹間には営巣場所をめぐるコンフリクトがある。羽化場所で営巣できる娘は1匹だけで、他は分散を強いられる。学術論文19にまとめられた。(pp. 52-53)

2. 「孤独性カリバチからみた社会性進化への遠い道:キスジベッコウとクロアナバチの社会構造」 1985年3月 特定研究『生物の適応戦略と社会構造』昭和59年度報告書 (単著)

単独性における娘蜂間での利他的契約を検討すると、キスジベッコウでは分散が、クロアナバチでは巣の共用が起る。社会性進化を可能にするのは、営巣過程の複雑化と並行して発揮される利他性の条件である。(pp. 52-53)

3. 「カリバチ類の社会進化:単独性からの出発:キスジベッコウとクロアナバチの社会構造」 1986年3月 特定研究『生物の適応戦略と社会構造』昭和60年度報告書 (単著)

同じ場所から羽化した娘蜂たちは、狩りが造巣に先行するベッコウバチでは、餌不足になると泥棒が分散に帰結する。造巣先行のアナバチでも同様の事情を誘発するが、他者へ巣を提供できる条件がある点で協同の契機、コロニアルな社会構造が生じる。(pp. 56-57)

4. 「生物群集における作用中心の動態と間接的相互作用の分析」
1991年3月 『地球共生系:生物の多種共存を促進する相互作用機構』研究成果報告書 (単著)

カリバチ類の営巣場所を中心とした相互作用と狩獵をめぐる種間関係から、多種の共存のしくみを探る。(p. 8) 研究代表者川那部浩哉。平成2年度科学研究費補助金(総合研究B)

5. 「生物群集構造論の新しい試み:作用中心散在論の展開」 1991年7月 重点領域『地球共生系』A02班研究資料集 (単著)
生態的作用の集中する場に成立する小さな生物群集とその散在分布のパターンと相互関連に注目して生物群集の重層的構造を探る。(pp. 59-62)
6. 「もっと無謀に」 [第一回研究会に参加してのやや長めの感想] 1991年 重点領域『地球共生系』総括班資料集 (単著)
共生のしくみを探るために、活発な議論と創造的なアイデアを出し、大胆な方向性を探るべしとの趣旨。(pp. 4-5)
7. 「共通の敵をもつ餌間の間接相互作用」 1992年6月 重点領域『地球共生系』全体合宿研究報告会レジュメ集 (共著)
追加分冊 遠藤知二・遠藤彰の共同発表報告。キスジベッコウバチに狩られるオニグモ3種において、特定の1種の狩猟圧が高いとクモの種間に「見かけの競争」が起る可能性がある。学術論文20としてまとめられた。(pp. 1-6)
8. (生態的作用中心論) 1996年3月 『地球共生系:生物の多種共存を促進する相互作用機構』研究成果報告書 (単著)
報告はタイトルがないが、カリバチ類の狩猟場所や営巣地や訪花場所などの散在する作用中心の動態解析から小さな生物群集を再構成する試み。(pp. 11-12)
9. 『岩倉上賀茂線道路改良計画に係わる深泥池と周辺の動物類現状調査資料集』 1997年2月 京都市建設局 (共編)
深泥池と周辺の動物の現状調査報告書。遠藤彰・竹門康弘の共同編集。(総頁148頁) 深泥池と浮島と周辺の開花植物を季節的にどのように昆虫類が訪花するか of フェノロジー (pp. 66-96)。「深泥池水域に生息する陸上昆虫」は環境科学 KK 乾風肇・北山昭・森正人らの協力を得て遠藤彰がまとめた (pp. 97-127)。「深泥池の鳥類とくにカモ類の生息状況・利用空間」は環境科学 KK の熊代直生らの協力を得て遠藤彰がまとめた (pp. 127-148)。
10. 「江戸の虫たちをめぐる表象と言説」 2002年 『自然観研究会報告書』 (単著)
日産科学振興財団。
11. 「ファーブル・昆虫記」の伝播圏:翻訳と読者あるいは観察と言葉」 2002年 『自然観研究会報告書』 (単著)
日産科学振興財団。

12. 「深泥池生物群集保全活用委員会報告」 2004年3月 京都市文化財保護課刊（共著）
横山卓雄・村上興正・光田重幸らと協同執筆。
13. 「木津川川原における訪花昆虫群集調査報告」 2004年3月 河川生態学術研究会木津川研究グループ編「2003年度報告書」（共編）
14. 『生物多様性をめぐる言説・表象の認識論的検討：博物学から現代生態学への言説と概念の変遷』 2006年6月 2005年度立命館大学学術研究助成報告書（編著）
15. 「動物と人のかかわりの歴史と現代」 2009年1月15日 学内研究公募 業務報告（単著）

[学会発表など]

1. 「ジガバチモドキ *Trypoxylon* 属3種の営巣行動と非成虫期死亡」
1974年3月 『第21回日本生態学会大会講演要旨集』（千葉）（単独）
竹筒トラップに営巣したジガバチモドキの比較生命表分析。（p. 184: C203）
2. 「オオシロフベッコウの営巣行動と他種との諸関係」 1975年3月
『第22回日本生態学会大会講演要旨集』（京都）（単独）
「行動の意味を探る」ミニシンポジウムを組織。営巣過程における他種との関係を分析するなかで行動の存在価を理解できる。（p.1C18）
3. 「オオシロフベッコウバチの獲物選択の営巣過程への影響」 1976年3月
『第23回日本生態学会大会講演要旨集』（名古屋）（単独）
狩られた獲物のクモの種類や大きさが営巣場所や営巣時間に影響し、結果的にそこで生じる他種との関係の差となること。（p. 3E33）
4. 「ゲンジボタル個体群の研究Ⅰ 成虫個体数の季節消長と移動」
1976年3月 『第23回日本生態学会大会講演要旨集』（名古屋）（共同）
京都清滝川のゲンジボタル（天然記念物）の個体数を標識再捕法で推定し、その動態を明らかにした。堀道雄らと共同発表。（p. 1E05）

5. 「ゲンジボタル個体群の研究Ⅱ 成虫の遡上と産卵集団の形成」
1976年3月 『第23回日本生態学会大会講演要旨集』(名古屋)
(共同)
同じくゲンジボタルの雌の深夜移動を探り、集団的な産卵場所の存在を明らかにした。 伴浩治らと共同発表。(p. 1E06)
6. 「オオシロフベッコウバチとヤドリニクバエの相互関係について」 1977年3月 『第24回日本生態学会大会講演要旨集』(広島) (単独)
営巣過程において寄生バエが飛来する段階とその寄生の成否を分析して、ハチの寄生回避のいくつかの効果を明らかにした。(p. 118)
7. 「オオシロフベッコウバチ(非成虫期)の死亡要因の分析」 1978年3月 『第25回日本生態学会大会講演要旨集』(福岡) (単独)
オオシロフベッコウバチの巣内における非成虫期の生命表分析。(p. 178)
8. 「*Episyron* 属ベッコウバチの餌選択についての比較検討:餌種の生存条件をめぐって」 1979年3月 『第26回日本生態学会大会講演要旨集』(横浜) (単独)
狩られたクモの種の判明している北米のシロフベッコウ属を含めて、季節的に変化するその種類構成から、ベッコウバチの狩猟条件の安定条件を推察した。(p. 262)
9. 「ミツガシワの開花現象と訪花昆虫の関係」 1980(昭和55)年7月 『第27回日本生態学会大会講演要旨集』(弘前) (単独)
京都深泥池のミツガシワの訪花昆虫を調べ、その送紛にはミツバチなどのハナバチ類のほかハナアブ類の関与が大きいことを示した。(p. 120)
10. “Nesting success of the spider wasp, *Episyron arrogans* (Hymenoptera Pompilidae)” 1980(昭和55)年8月 XVI. International Congress of Entomology, Abstract (Kyoto) (単独)
オオシロフベッコウバチの営巣成否の要因を、その営巣過程における他種との関係の生起との関係で分析した。(p. 127)
11. 「訪花性昆虫の相互関係の予備的検討:尾瀬ヶ原での観察から」
1981年(昭和56)8月 『第28回日本生態学会大会講演要旨集』(札幌) (単独)
尾瀬ヶ原の秋の開花植物数種の訪花昆虫を調べ、それらの選好性が日周的に大き

く異なることなどを確認した。(p. 95)

12. 「カリバチ類の寄生回避の問題をめぐって：営巣行動の拘束性と修飾性」 1981(昭和56)年9月 『日本昆虫学会第41回大会講演要旨集』(神戸) (単独)

寄生回避を行動上の特性だけでなく、個別のコンテキストにおいてとらえることの意義を、オオシロフベッコウなどの例で紹介した。 シンポジウム「昆虫における個体性と社会進化」における講演。(p.34)

13. 「「寄生戦略」と「寄生回避戦略」の抗争」 1982(昭和57)年12月 日本動物行動学会第1回大会(京都) (単独)

ポスターセッション。 寄生と寄生回避を双方の論理でとらえ、そのコンフリクトの動態として分析することを、オオシロフベッコウとヤドリニクバエの例で示した。

14. 「キスジベッコウ *Batozonellus lacerticida* の社会構造－血縁と個体差をめぐって」 1984年3月 『第31回日本生態学会大会講演要旨集』(東京) (単独)

札幌のキスジベッコウ個体群において経代の個体識別で血縁を追跡し、営巣成功や営巣過程において、とくに姉妹間の関係を含めた社会構造を明らかにした。(p. 259)

15. 「クロアナバチとヤドリニクバエ：労働寄生をめぐる相互関係」 1985年4月 『第32回日本生態学会大会講演要旨集』(広島) (単独)

アナバチヤドリニクバエがクロアナバチにどのように労働寄生するかを、営巣密度、ハチのフリージングの効果や、複合営巣の影響などを通して分析した。(p. 54)

16. 「クロアナバチの対寄生者「適応」：アナバチヤドリニクバエ」 1985年12月 日本動物行動学会第4回大会(東京) (単独)

ポスターセッション。 アナバチとヤドリニクバエの寄生 / 寄生回避を行動的側面から量的に分析した。

17. 「クロアナバチのアナーキズム：営巣をめぐる個体間関係」 1986年3月 『第33回日本生態学会大会講演要旨集』(京都) (単独)

アナバチの営巣において同種の他個体が侵入してくる、Joint-nesting の頻度を調べ、それがアナバチヤドリニクバエによる寄生発見率を高めていることを示唆する結果を得た。(p. 204)

18. 「キスジベッコウ *Batozonellus lacerticida* の社会構造・再論」
1987年3月 『第34回日本生態学会大会講演要旨集』(沖縄) (単独)
キスジベッコウの社会構造を血縁・配偶関係を含めて、場所的な条件との関連で再論した。(p. 228)
19. 「間接作用の立場から」 1988年3月 『第35回日本生態学会大会講演要旨集』(仙台) (単独)
従来ほとんど無視されてきた間接作用の重要性を、自身の仕事と D. S. Wilson のシテムシとイソウロウダニの仕事などを紹介しながら議論した。シンポジウム「生物間相互作用と種の形質変化」における講演。(pp. 40-41)
20. “Reading out “the program” of behaviour in hunting wasp” 1988年6月 The proceedings of the 10th congress of the society of Animal Physiology of Japan. (Kyoto) (単独)
動物行動の意味は生理機能のみではなく、他者との関係のなかで理解できることを、自身の仕事などを紹介しながら議論した。動物生理学会のシンポジウム「動物行動学の視点から」において講演。(p. x)
21. 「カリバチの行動を読む」 1989年6月 基礎心理学フォーラム(立命館大学) (単独)
動物の行動・心理を理解するうえで、とりわけ他者との相互関係を通して分析することの重要性をカリバチ類の例を挙げて議論した。フォーラム「新しい行動研究への展望」において講演。
22. “Kinship structure and reproductive success in a local population of the spider wasp, *Batozonellus lacerticida*” 1990年8月 Vth International Congress of Ecology, Abstract (Yokohama) (共同)
キスジベッコウの血縁関係を含めた社会構造について、定着的営巣と移動の分析。遠藤彰・遠藤知二で共同発表。学術論文 19 にまとめる。(p. 8)
23. “Indirect interactions between and within prey species with dissimilar defenses against a common predator” 1990年8月 Vth International Congress of Ecology, Abstract (Yokohama) (共同)

- 捕食者キスジベッコウと餌種オニグモ属 3 種の間の間接作用について遠藤知二・遠藤彰で共同発表。学術論文 20 にまとめる。(p. 17)
24. 「カリバチ類のギルド構造:オニグモ狩りのギルドの分析」 1991 年 3 月 『第 38 回日本生態学会大会講演要旨集』(奈良) (単独)
円網を張るオニグモ類を狩るベッコウバチ 5 種の獲物の種類構成を地域比較して、共通資源を利用するギルド (同業者) 間での共存のしくみを探る。(p. 264)
25. 「生物群集構造論の新しい試み:作用中心散在論の展開」 1991 年 3 月 7 月 26-28 日 文部省重点領域研究「地球共生系:生物の多種共存を促進する相互作用機構」研究報告会 (単独)
26. “When and how does a hunter become a thief? : An analysis on kleptoparasitism in a spider wasp, *Batozonellus lacerticida*”
1991 年 8 月 22nd International Ethological Conference, Abstracts (Kyoto) (共同)
キスジベッコウがどのような状況で「泥棒」になるか? 営巣密度や個別状況、体のサイズなどとの関係を分析した。 遠藤知二と共同発表。(p. 80)
27. 「「狩猟/泥棒」のコンテキストを分析する:キスジベッコウの場合」
1992 年 3 月 『第 39 回日本生態学会大会講演要旨集』(名古屋) (共同)
営巣過程で生じる同種他個体による労働寄生 (泥棒) がどのようなコンテキストで起るのかを分析した。(p. 181)
28. 「共通の敵をもつ餌間の間接的相互作用」 1992 年 6 月 18-20 日 文部省重点領域研究「地球共生系:生物の多種共存を促進する相互作用機構」研究報告会 (単独)
29. 「陸上生物群集の複雑さを探る:相互散在する作用中心から」 1992 年 11 月 京都大学生態学研究センター『公開講座「生態学と地球環境」要旨集』 (単独)
陸上における生態的な作用中心が形成されるエフェメラルではあるがそこそこに生じる普遍的な事件も含めて、生物群集を、従来から問題にされてきている大きな構造だけに帰着させずに、その複雑な様相を捉える試み。(p. 11-12)
30. 「作用関係としての群集の時空構造」 1993 年 3 月 『第 40 回日本生態学会大会講演要旨集』(松江) (単独)

狩蜂とその獲物に焦点をあてて、そのリンキング・ネットワークを、札幌の豊平川の川原をモデルに構築する試み。(p. 229)

31. 「キスジベッコウの営巣成功に影響する諸条件」 1993年3月 『第40回日本生態学会大会講演要旨集』(松江) (共同)

キスジベッコウの営巣成功にどのような要因が関与しているかを分析。ここではヤドリバエのような寄生者がほとんど回避されている。遠藤知二・遠藤彰の共同発表。

(p. 235)

32. 「狩蜂にみる「ものづくり」と「泥棒」」 1994年1月 「京都国際セミナー 安定社会の総合研究:ものをつくる・つかう」京都ゼミナールハウス(京北町) (単独)

33. 「「オニグモ狩り」ベッコウバチ類のギルド構造:地域比較から」 1994年3月 『第41回日本生態学会大会講演要旨集』(福岡) (共同)

オニグモ類を狩るベッコウバチ類4種の共存機構として、その地域のクモの種類と大きさ、とくに成長の季節的推移との関連が重要であることを推察した。

34. 「キスジベッコウを介したオニグモ種間の apparent competition の検討」 1994年3月 『第41回日本生態学会大会講演要旨集』(福岡) (共同)

キスジベッコウの狩るオニグモ3種の間で、季節のはじめに狩られるヤエンオニグモへの依存度が、後期のアカオニグモやキバナオニグモへの依存度と関連して、オニグモ類の間に「見かけの競争」「間接作用」が生じることになっている。遠藤彰・遠藤知二の共同発表。(p. 162)

35. 「キオビベッコウの種内寄生:寄生過程における個体間の相互作用」 1994年12月 『日本動物行動学会第13回大会講演要旨集』(大阪) (共同)

丹後箱石浜の海岸砂丘においてキオビベッコウの種内労働寄生が営巣後に巣穴を掘り返すかたちで頻発していることを明らかにした。遠藤知二・遠藤彰・大谷剛の共同研究発表。ポスターセッション。(p. 19)

36. 「(シンポジウム) 地球共生系:多様な生物の共存する仕組み」 1995年1月28日・29日 「第9回「大学と科学」公開シンポジウム

組織委員会」東京有楽町朝日ホール(マリオン 11 階) (共同)

パネルディスカッション司会。

37. 「海岸砂丘におけるベッコウバチ・ギルドの特性について」 1995年3月 『第42回日本生態学会大会講演要旨集』(盛岡) (共同)

丹後の海岸砂丘において海辺から内陸に向けて水盤トラップを仕掛けて、ベッコウバチ類の種類構成がどのように推移するかを調べた。遠藤知二・遠藤彰の共同研究発表。(p. 44)

38. 「泥棒する蜂 される蜂、とかくこの世はままならぬ:キオビベッコウ *Batozonellus annulatus* の種内寄生のタイミング」 1995年12月 『日本動物行動学会第14回大会講演要旨集』(三田) (共同)

キオビベッコウにおいて同種の他個体の巣に労働寄生するには、さまざまなタイミングが重要になる。泥棒する頻度は個体によって差があるが、泥棒される頻度は泥棒される頻度で差し引きになる。遠藤彰・遠藤知二・大谷剛の共同研究発表。ポスターセッション。(p. 32)

39. 「生態的断片に成立する小さな生物群集にみる「揺らぎ」あるいは「再帰性」:生態的事件からさまざまな生態遷移へ」 1996年1月 「京都国際セミナー 安定社会の総合研究:ことがゆらぐ・もどる/なかだちをめぐって」京都ゼミナールハウス(京北町) (単独)

40. 「趣旨説明」 1996年2月24日 「人間活動、外来生物の侵入・導入による生物群集の変動」研究会(京都) (単独)

41. 「深泥池浮島湿原と周辺二次林における開花フェノロジーと訪花昆虫」 1996年3月 『第43回日本生態学会大会講演要旨集』(東京) (共同)

深泥池の開花の季節的フェノロジーとそれへの訪花昆虫類の総合調査。湿地の特性として、通常は花枯れの起る夏季にも水生植物の花がありハナアブ類が豊富に存在する。松井淳・遠藤彰・丑丸敦史・藤田昇の共同研究発表。(p. 30)

42. 「キオビベッコウの営巣行動と個体の履歴」 1996年11月 『日本動物行動学会第15回大会講演要旨集』(東京) (共同)

前日の営巣成否をおさえて、その個体が翌日の早朝に泥棒するかどうかを調べた。

狩猟ないし営巣に失敗した個体が泥棒する傾向を示すが、それは小型個体であることが多いことがかなり明確になった。遠藤彰・遠藤知二・大谷剛の共同発表。ポスターセッション。(p. 31)

43. 「キオビベッコウの種内寄生:その時空間動態」 1997年3月 『第44回日本生態学会大会講演要旨集』(札幌) (共同)

種内寄生の起る特徴として、空間的には営巣の集中するパッチで起り、時間的には営巣季節の初期に多い。遠藤知二・遠藤彰の共同発表。ポスターセッション。

44. 「キオビベッコウの種内寄生:誰が「泥棒」になるか」 1997年12月 『日本動物行動学会第16回大会講演要旨集』(京都) (共同)

労働寄生(泥棒)する頻度にかなり個体差がある。狩猟に失敗しやすい小型個体は労働寄生することで営巣におけるハンディをいくらか取り戻している。遠藤彰・遠藤知二の共同発表。ポスターセッション。(p. 26)

45. 「キオビベッコウによるナガコガネグモ利用の空間パターン」 1998年3月 『第45回日本生態学会大会講演要旨集』(京都) (共同)

営巣場所の周辺の獲物となるクモの密度は季節が進むにつれ減少し「ドーナツ」現象が起る。しかし営巣場所は毎年安定しており、その背景にはクモのソース個体群から分散するクモの供給が継続するからとみられる。遠藤知二・遠藤彰・藤永由美子の共同発表。ポスターセッション。

46. 「カリバチ類からみた流域環境」 1998年6月? 京都大学防災研究所水資源環境センター研究会(宇治) (単独)

47. 「カリバチの世界:さまざまな虫たちとの相互作用を通して」 1998年10月 第27回びわ科学懇談会(大津) (単独)

カリバチ類の営巣行動を通して起る、さまざまな他種とのかわりをVTRを交えて解説。(遠藤知二・藤永由美子と)

48. 「ベッコウバチ/コガネグモ=オニグモ生態複合における「狩り」と「泥棒」のフェーズ転換とその意味」 1998年12月 1997年度[ママ]第6回応用化学センター(立命館大学理工学部) (単独)

49. 「キオビベッコウは群集構造に影響を与えるか?」 1999年3月 『第46回日本生態学会大会講演要旨集』(松本) (共同)

狩猟によってナガコガネグモの網の密度が急減するが、網の密度が減ると周辺の

- 飛翔昆虫の動きに変化が生じるかどうか、操作実験も含めて検討した。遠藤知二・遠藤彰の共同発表。ポスターセッション。(p. 237)
50. 「生物学と工学の狭間へ:「逆工学」と「生態系工学」の温故知新」
1999年5月 立命館大学理工学振興会講演会(単独)
ミクロとマクロの生物学と工学の論理のかみ合わせによる将来の展望を語る。
51. 「キオビベッコウの種内寄生の起る条件」 2000年3月 『第47回日本生態学会大会講演要旨集』(東広島)(共同)
キオビベッコウにおける種内寄生の起る条件について総合的モデルの提唱。遠藤彰・遠藤知二の共同発表。
52. 「砂丘の上の food web :ベッコウバチとクモをとりまく生物群集」
2000年3月 第47回日本生態学会大会(東広島)(共同)
自由集会「第7回生物群集を考える」での講演。 遠藤知二・遠藤彰の共同発表。
53. 「動物生態学のことば:狩蜂をどう語るか:フェアブルから現代生態学をかすめる低空飛行」 2000年6月 「安定社会と言語」研究会(京都)(単独)
京都大学人文科学研究所の横山俊夫班長のもとで、研究発表。科学のことばを活性化するために。
54. 「博物学とフェアブル」 2000年9月 「自然観研究会」(京都)(単独)
立命館大学衣笠研究機構の遠藤彰代表の研究会における研究発表。博物学と近代生物学の切断と連続を議論。現代生物学の歴史的な位相をとらえるために。
55. 「Natural History (博物学)のエピステーメ:M. Foucault の『言葉と物』をめぐる」 2000年10月 「争点としての生命」研究会(京都)(単独)
56. 「(フォーラム) 着物の伝統・未来:着物の閉塞感をうち破ろう」
2000年11月 「日本文化デザイン会議 2000 京都」京都国際会議場(共同)
(ひびのこずえ・深井晃子・横山俊夫と) 『創造新世紀』:90-91pp. JIDF (日本デザイン・フォーラム) (深井晃子による記録)。

57. 「(フォーラム) 鳥の世界:鳥島のアホドリ」 2000年12月 「21世紀の花鳥風月:京都からの提言第2回」京都アスニー (共同)
長谷川博・横山俊夫と。
58. 「「フェアブル・昆虫記」の伝播と日本の自然=文化の諸相:翻訳と読者あるいは観察と言葉」 2001年1月 「自然観」研究会(金沢) (単独)
石川県立農業短期大学の上田哲行代表の研究会での研究発表。世界的にみても希な文化的現象として日本の「フェアブル好き」の背景を探る。
59. 「フェアブル『昆虫記』という言説を可能にしたもの」 2001年7月 「安定社会と言語」研究会(京都) (単独)
京都大学人文科学研究所の横山俊夫班長のもとで、研究発表。
60. 「「秋草の美学」から「虫の図譜」」 2002年1月 「自然観」研究会(京都) (単独)
石川県立農業短期大学の上田哲行代表の研究会での研究発表。
61. 「有機体概念の変遷と生態学の周辺」 2002年3月 「争点としての生命」研究会(京都) (単独)
立命館大学衣笠研究機構の遠藤彰代表の研究会における研究発表。
62. 「生態学が抱える言語問題」 2002年6月8日 「文明と言語研究会」京都大学人文科学研究所 (単独)
63. 「生物の適応進化をどうとらえるか:逆工学 reverse engineering の発想」 2003年2月1日 近畿科学協会研修講座(大阪) (単独)
64. 「生物の色模様の意味すること:背景と他者への眼と他者からの眼」 2003年2月4日 「色彩研究会」京都副食文化研究所(京都) (単独)
65. 「海岸砂丘における訪花性昆虫の季節変動」 2003年3月20日 「日本生態学会第50回大会講演要旨集」(共同)
遠藤知二らと共同。
66. 「ユクスキュルの Umwelten への遠足(エクスカージョン):自然の対位法を

- 見抜き「総譜」を描くこと」 2003年6月14日 京都大学人文科学研究所共同研究「文明と言語」研究会（単独）
67. 「コメント」 2003年7月5日 シンポジウム「人文学と生命」京都大学人文科学研究所主催（単独）
68. 「現代生態学の言説の諸問題」 2003年9月20日 「生命科学・生命技術の進展に対応した理論と倫理と科学技術社会論の研究開発」研究会(代表 小泉義之)(東京)（単独）
「現代生態学の言説の諸問題：環境概念をめぐる」との表記もあり。2004年12月との記載もあり。*
69. 「狩蜂の話」 2003年12月16日 「狩蜂の話」（単独）
70. 「自然のバランス概念の変遷」 2004年1月30日 衣笠研究機構プロジェクト「争点としての生命」研究会(先端総合学術研究科「プロジェクト予備演習」セッション)（単独）
71. 「木津川川原における訪花昆虫群集の予備調査報告：砂州地形との関連で」 2004年2月29日 河川生態学術研究会木津川研究グループ生物群集班研究会（単独）
72. 「系統進化の言説と行動の論理：比較の言説：種の生物学の系譜(狩蜂をどう語るかⅡ)」 2004年10月23日 「文明と言語」研究会(京都大学地球環境学堂三才学林 2004.10.23)17pp+図表5（単独）
73. 「木津川川原における訪花昆虫を中心とした群集(予備報告04年度)」 2004年11月4日 「河川生態学術研究会木津川研究グループ：生物群集班」研究会(大阪)（単独）
74. 「コメント」 2005年2月 連続シンポジウム「先住民という言葉に内実を与えるために／シンポジウムⅠ 伝統は近代を変えることができるか：「野生の思考」の挑戦」『立命館言語文化研究』16(3):32-33pp, 38-39pp. (立命館大学国際言語文化研究所)
一覧には「動物生態学からのコメント」という記述もあり。*（単独）
75. 「『難波鉦』『藤袴』現代語訳と注釈」 2005年3月 「文明と言語」研究会（単独）
76. 「木津川川原の開花植物フェノロジーと訪花昆虫群集の季節動態」(予

- 備報告 05 年度) 2005 年 10 月 5 日 河川生態学術研究会木津川
研究グループ生物群集班研究会(大阪) (単独)
77. 「ニワシドリの「審美／遊戯的」性淘汰を可能にしたニューギニアある
いは D/G「リトルネロ」のプラトー探検」 2006 年 3 月 24 日 D/G 研
究会(立命館大学) (単独)
78. 「木津川川原の訪花昆虫の動態」 2006 年 5 月 20 日 河川生態
学術研究木津川グループ研究会(京都市リサーチパーク) (単独)
79. 「狩蜂をどう語るか III .進化の空隙としての生態学の舞台」 2006
年 6 月 3 日 文明と言語研究会(京都大学人文科学研究所・三才学
林) (単独)
80. 「生物／自然をどう語るか」 2006 年 8 月 17 日 青森県高等学校
教育研究会・理科部会(青森高等学校) (単独)
81. 「フェアブル『昆虫記』の射程:反・進化論の意味すること」 2006 年 9
月 18 日 日本昆虫学会第 66 回大会シンポジウム「フェアブル昆虫記
とその後の 100 年」講演要旨 2006:106p.(鹿児島大学) (単独)
82. 「木津川川原の訪花性昆虫群集の季節推移」 2006 年 10 月 28 日
河川生態学術研究木津川グループ研究会(京都市リサーチパーク) (単
独)
83. 「D.タカーチ『生物多様性という名の革命』へのコメント」 2006 年 12
月 3 日 生物学史分科会シンポジウム「科学と保全と価値の交差点と
しての生物多様性」(順天堂大学) (単独)
84. 「『難波鉦』『納戸』評釈」 2007 年 3 月 10 日 文明と言語研究会
(京都大学人文科学・三才学林) (単独)
85. 「『本能』はどう説明できるか:フェアブルの『反進化論』の彼方」
2007 年 9 月 2 日 [『昆虫記』刊行 100 年記念日仏共同企画]『ファ
ーブルにまなぶ』講演会, 北海道地域実行委員会主催 (単独)
86. 「『難波鉦』『一時雨』の評釈」 2007 年 12 月 22 日 「文明と言語」

研究会(京都大学人文科学研究所・三才学林) (単独)

87. 「昆虫をめぐる日本の文化:人の内外、細部の「むし」をめづること」
2008年7月20日 『日仏友好百五十年記念国際シンポジウム』滋賀
県立琵琶湖博物館(招待講演) (単独)
88. 「『難波鉦』松之部「一時雨」<翻刻と現代訳> 2009年10月17
日 京大人文研共同研究会『色道書・言語・文明史』(単独)
89. 「江戸の虫たちの事情:『五百崎虫の評判』の周辺」 2010年1月23
日 京大人文研共同研究会『色道書・言語・文明史』(単独)
90. 「狩蜂研究の展開 Fabre から現代へ/共存と競争の生態学」
2010年11月25日~26日 名古屋大学理学研究科/理学部生命
理学科 特別講義 (単独)
91. 「森を飛び交う生きものたち」 2011年3月22日 長谷川博(東邦
大学)との対談 万博記念公園・自然観察 学習館, 千里文化財団主
催 (共同)
「森を飛び交う動物たち」との表記もあり。*
92. 座談会「エコロジーのポテンシャル」 2011年10月4日 生命誌研
究館 (共同)
中村桂子・大村敬一・近藤和敬と。「討議 生存のエコロジー」として、『現代
思想』39(16)に所収。*

[講座]

1. 「狩蜂の世界」 1991年? 立命館大学土曜講座

2. 「水辺の小さな生き物たちとの対話と共生：創造的な水辺と不毛の砂地？」 2000年5月 立命館大学土曜講座
3. 「生物をめぐる文化探訪」(1)～(6) 2005年4月～7月 NHK 京都文化センター
 (1)ラスコーの動物壁画と野生の思考(4月17日)、(2)エジプトのヒエログリフの動物たち(5月15日)、(3)ギリシアの自然観とアリストテレスの動物誌(6月5日)、(4)ローマの博物誌(6月17日)、(5)生命の樹からルネサンスの怪物たち(7月3日)、(6)博物学の誕生 - 自然の体系の探求(7月17日)
4. 「現代生物学からの問いかけ」(1)～(6) 2005年10月～翌3月 NHK 京都文化センター
 (1)進化の空間と時間(10月16日)、(2)遺伝子概念の変遷からポストゲノムの展望(11月20日)、(3)生命起原論の展開(12月18日)、(4)系統樹を構成する試み(1月15日)、(5)進化生物学の新しい潮流：細胞・発生・性・遺伝子と表現型の相互適応(2月5日)、(6)生態的複雑さの認識(3月5日)
5. 「動物から文化を読み解く：博物学の誕生まで」(1)～(6) 2006年4月～8月 NHK 京都文化センター
 2005年度と同じ。
6. 「動物から文化を読み解く：現代生物学からの問いかけ」(1)～(6) 2006年10月～翌3月 NHK 京都文化センター
 2005年度と同じ。
7. 「動物から文化を読み解く」(1)～(6) 2007年4月～9月 NHK 文化センター京都
 (1)ラスコーの動物壁画と野生の思考(4月15日)、(2)エジプトのヒエログリフの動物たち(5月20日)、(3)ギリシアの自然観とアリストテレスの動物誌(6月17日)、(4)ローマの混沌と博物誌(7月15日)、(5)生命の樹からルネサンスの怪物たち(8月19日)、(6)博物学の誕生(9月30日)
8. 「生物の世界を語りなおす」(1)～(6) 2007年10月～翌3月 NHK 文化センター京都
 (1)江戸の博物空間と若冲の幻想のファウナ(10月21日)、(2)分類の方法と思想

- をめぐって(11月18日)、(3)ファール『昆虫記』の逸脱 / 反進化論の意味(12月16日)、(4)HowとWhyの問い / 自然淘汰の作用と「適応」(1月20日)、(5)パラジットの図式と変換 / 間接作用こそが重要(2月17日)、生態学版ドン・キホーテの再出発(3月9日)
9. 「生物の世界を語りなおす I」(1)~(6) 2008年4月~9月 NHK文化センター京都
- (1)「隠喩としてのミミズ」(4月20日)、(2)「ドーキンジャン・アニマルの世界」(5月18日)、(3)「チェシャー猫の笑いのように」(6月15日)、(4)「染色体のガヴォット」(7月27日)、(5)「バイオモルフ・ランドの探検」8月31日、(6)「生成原理としてのブリコラージュ」(9月21日)
10. 「生物の世界を語りなおす II」(1)~(6) 2008年10月~翌3月 NHK文化センター京都
- (1)「蘭と蜂の愛のかたち：花の仕掛け」(10月19日)、(2)「アンコウの時間：大きな魚と小さな魚」(11月16日)、(3)「ニワシドリの美学：テリトリとコード変換」(12月21日)、(4)「めくるめく意識」(1月18日)、(5)「自然の総譜を描くこと」(2月22日)、(6)「変換装置としての生物の世界」(3月15日)
11. 「虫をめぐる文化探訪：日本の「むし」尽くし」(1)~(6) 2009年4月~9月 NHK文化センター京都
- (1)『枕草子』『虫めづる姫』『今昔物語』鈴鹿の雀蜂(4月19日)、(2)民話のなかの『虫』たちと『針聞書』(5月17日)、(3)『和漢三才図会』の虫たちと『五百崎虫の評判』(6月21日)、(4)『和漢三才図会』の虫たちと『五百崎虫の評判』(6月21日)、(5)江戸の虫譜『千虫譜』ほか博物画の世界へ(8月30日)、(6)明治から現代へ『虫好き』の衰退と復活(9月27日)
12. 「生物の世界を語りなおす：アート生物学」(1)~(6) 2009年10月~翌3月 NHK文化センター京都
- (1)狩蜂たちの建築史：穴掘り・石器・土器・パルプ・巣とは何か(10月18日)、(2)ミツバチたちのダンス「言語」の神話とその後(11月15日)、(3)コウモリの超音波テクノロジー：「逆工学」で理解する(12月20日)、(4)トビケラからビーバーまで：『延長された表現型』(1月24日)、(5)動物建築という『外の生理学』：遺伝子作用のインフラ理解(12月28日)、(6)「生態系エンジニア」としての生物体：自律形成と他律形成作用(3月28日)

13. 「生物の世界を語りなおす-「アート生物学」の試み パートⅡ」(1)～(6)
2010年4月～9月 NHK文化センター京都
- (1)擬態という、とりあえず視覚的詐欺の試み：『珍虫奇虫』(4月18日)、(2)糞と死体への愛：『八工全書』(5月16日)、(3)永遠なる臨機応変=万能の分解者モード(6月20日)、(4)熱い血をよこせ：昆虫版ドラキュラ侯爵：ノミ篇(7月18日)、(5)めくるめく『昆虫劇場』への注視—Aldrovandi と Mouffet：西欧中世の逸脱(8月29日)、(6)人と昆虫への冷笑と慈愛：Grandville の銅版画の背景(9月19日)
14. 「生物の世界を語りなおす-「アート生物学」の試み パートⅢ」(1)～(6)
2010年10月～翌3月 NHK文化センター京都
- (1)「ぶてらのどん」とコナン・ドイル あるいは奇想の現実性(10月17日)、(2)「どーどー」とルイス・キャロル あるいは絶滅をめぐる生物学の言説(11月28日)、(3)「げじげじ」と梶原景時 あるいは存在の悪夢と喜劇(12月19日)、(4)「ばく」と澁澤龍彦 あるいは夢の食物連鎖(1月16日)、(5)「かものはし」とイマヌエル・カント あるいは言語哲学と動物分類の限界(2月20日)、(6)「きりん」とシャルル・フーリエ あるいは「真理の擁護」(3月27日)
15. 「生物の世界を語りなおす-「アート生物学」の試み パートⅣ」(1)～(6)
2011年4月～9月 NHK文化センター京都
- (1)からだに棲まう「虫」たちの婆娑羅 『針聞書』再訪、(2)革命を手引きした「機械の書」 S. Butler 『エレホン』、(3)病気の分類とオーガニック。ハピネス E. Darwin 『Zoonomia』、(4)風邪にはじまり風邪におわる 別役実『当世病気道楽』の形而上学的病の論、(5)人類史の欠落 逃走した人類 J. Diamond 『銃・病原菌・鉄』、(6)ウイルスとバクテリアと多細胞生物体 W. D. Hamilton 「性と病気」仮説
16. 「新・生物の世界を探る「自然と文化を再考する——深泥池の視点から」 2011年10月～翌3月(予定) NHK文化センター京都
- (1)深泥池の不思議 歴史のなかの深泥池、(2)深泥池 氷期以来の自然史—浮島がなぜあるか、(3)四季の多彩な動植物 南と北の動植物が共存する、(4)生物群集としての存在意義 複雑で多様な生息場所、(5)京都の池 淀川水系のなかで 洛北から洛西の池から巨椋池まで、(6)自然と文化のありようを再考する 「文化財」とは何か [(2)以降予定]

[講義]

1. 「生物多様性の表象と言説 「生物の多様性」」 衣笠 C 文学部
#0. テイクオフ 低空飛行で、#1. ラスコーのファウナ、#2. 野生の思考、#3. エジプシャン・アニマルズ、#4. ギリシャのピュシス、#5. ローマの博物誌と現実知、#6. アラビアの想像力 退屈な夜、#7. ルネサンスの魔術とスコラ、#8. 類似の思想と表象の混乱 怪物たちの徘徊、#9. 博物学の普遍精神 自然の体系の研究、#10. 存在の連鎖と変形の論理 世界秩序の変調、#11. 自然神学の到達点 ヴィクトリアの博物学、#12. 東アジアの「博物学空間」、#13. 有機体という概念の誕生、#14. 進化論のエピステーメ
2. 「自然とはなにか 現代生物学からの新しい問いをめぐって 「自然と進化」」 衣笠 C 文学部
#0. 自然とは何か、#1. 生きているとはどういうことか：生物と無生物 エントロピーの原理と生命、#2. 生命の起源：生化学的反応系として、#3. 遺伝子概念の変遷と分子のことは、#4. 真核生物の誕生の謎：モネラの共生、#5. 減数分裂と恋愛：性の起源、#6. 多細胞化と「遺伝プログラム」、#7. 絶滅と適応放散：シヴァの宇宙舞踏、#8. 系統を構成する試み、#9. 隠喩としてのミミズ：「個体淘汰 VS. 群淘汰」論争、#10. 「利己的遺伝子」と「延長された表現型」、#11. コンシャスな脳の内と外：ドリトル先生の幻の普遍言語、#12. 多細胞生物体という存在、#13. 生態学の誕生：自然の複雑性の認識、#14. 生物群集という「つながり」、#15. 生物多様性と生態的複雑性の時代：エピローグ
3. 「環境科学 生態学の視点」 BKC 理工学部
#1. 環境とは何か だれにとっての〈環境〉なのか、#2. 生物多様性 Biodiversity：歴史的背景と生物地理的制約、#3. 地球環境の視点と地域環境の視点：物質とエネルギーの流れ（循環系）、#4. 生物はどこにいるか：清楚場所の概念、#5. 生物はなにをしているか：生態的地位の概念、#6. 生態系と生物群集：海洋・河川・湖沼・湿地・草原・森林、#7. 生物の個体数と社会関係：個体群の増殖と動態、#8. 食物網としての相互関係：捕食（食う食われる）関係、#9. 競争的関係と協同的關係：競争漢和の原理と相互進化、#10. 環境を変える生物：間接作用の重要性、#11. 生

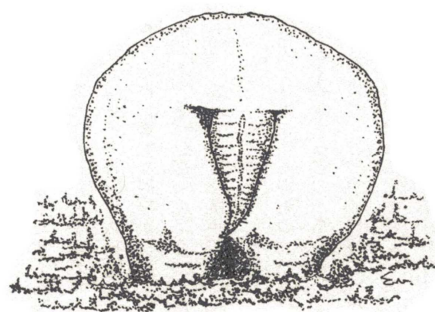
態的複雑系の特性：生物群集の多重構造、#12.生物群集の動態としての生態遷移：経時的変化とバランス、#13.自然の経済：生態的思想の歴史と現在、#14.ヒトは何をしてきたか：環境史の試み、#15.「われわれの環境」の未来をどう描くか

4. 「生物科学 進化をめぐる言説」 BKC 理工学部

#1.われわれの存在の不思議さ：C. Darwin は何を説明したか、#2.本能は進化で説明できるか：J. H. Fabre の深い疑問、#3.比較の方法と系統論：狩蜂の進化を追うパラダイム転換 / W. H. Wheeler から E. O. Wilson まで、#4.利他性の進化の謎に迫った W. D. Hamilton：社会性昆虫のパラドックス、#5.たくさんの適応解 (1) 飛翔をめぐる 始祖鳥？ S. Chatterjee の発見、#6.たくさんの適応解 (2) 視覚をめぐる M. Land と R. Dawkins の試み、#7.カンブリア紀の怪物たち：多細胞生物の誕生と拡散 Conway-Morris の解釈、#8.恐竜たちの絶滅：巨大隕石の衝突によるカタストロフ Alvarez の仮説と検証、#9.悪意ある環境 / 生きている方法の困難：ナマケモノの論理と Van Valen の「赤の女王」仮説、#10.最初の遺伝子は珪酸の情報？ / 核酸-タンパク質の超サイクル説の行方：Cairns-Smith の冒険、#11.チエシャー猫の笑いのように：L. Margulis の真核生物起源 = 細胞共生説、#12.染色体のガヴオット：減数分裂 = 有性生殖の意味と謎 Margulis and/or Hamilton、#13.バイオモルフ・ランドを駆け抜ける：進化についての Dawkins の思考実験、#14.「われらが脳」は適応の産物か？：Brain Science は何を明らかにするか D. C. Dennett、#15.プリコラージュという方法：F. Jacob と C. Levi-Strauss

5. 「生物科学 生態学のスコープ」 BKC 理工学部

#1.生態的複雑性の認識へ、#2 博物学のとらえた秩序：C. von Linné 自然の体系、#3.進化論の自然認識：C. Darwin 自然の経済、#4.環境と環世界：J. von Uexküll の意味論再考、#5.遠隔操作パワー：花と昆虫の相互関係、#6.生態的な場と他者の関係：Habitat と Niche C. S. Elton と G. E. Hutchinson、#7.適応とは何か：遺伝子と表現型概念の拡張 R. Dawkins、#8.生態的相互作用：個体間関係と個体群動態、#9.食う・食われる関係：Lotka-Volterra の微分方程式、#10.競争と共存をめぐる：ニッチの重複と回避、#11.自然のバランス？：生態的間接作用の重現、#12.生物群集の構造：さまざまなネットワーク、#13.生態遷移という時空動態：攪乱と安定、#14.生物多様性と生物複雑性：森と流域と海、#15.ヒトは何をしてきたか：環境史の試みに向けて



※「遠藤彰さんを偲ぶ会」(京都大学・薫風会、立命館大学大学院先端総合
学術研究科主催、2012年3月11日開催、ウエスティン都ホテル京都・
山城の間)にて配布

INVISIBLE NATURE
POLYPHONY IN ECOLOGY

